

ダルマキールティの「慈悲の修習」の議論

稲 見 正 浩

0. ダルマキールティの *Pramāṇavārttika* (PV) 第二章は、仏陀が規範 (*pramāṇa*) であることの説示をそのテーマとしている。彼は其中で、仏陀が規範であることの根拠は仏陀の慈悲である (PV. II. 34a)¹⁾、と述べる。この仏陀の慈悲者というアスペクトは、ディグナーガの *Pramāṇasamuccaya* の帰敬偈に説かれる四つのうちの最初のものであり、大乘仏教においては特に重要な概念であることは言うまでもない。仏陀は過去の幾世にもわたる修習 (*abhyāsa*) ですっかり身についた慈悲によって、四聖諦を具現したという立場にダルマキールティも立脚している。

しかし、仏陀は修習によって慈悲がすっかり身についている、つまり慈悲が本性となっている (*sātmibhūta*) というけれども、はたしてその様なことが可能であろうか。ダルマキールティは、PV. II. 34-119 において、慈悲の修習の場である輪廻の存在を立証した後、PV. II. 120-131ab において、この問題を論じている。本稿ではそこでの議論を検討したい。

1. ダルマキールティは、次の様な反論を想定している。

修習によって〔慈悲などが〕卓越しても、本性を超えることはありえない。たとえば、跳躍〔の場合、人はいくら練習しても1メートル跳躍することはできないし、〕水を熱する〔場合、水はいくら熱されても燃えることはない〕ように。(PV. II. 120a-d)

ここで「本性 (*svabhāva*)」というのは、心には慈悲などの対治 (*vipakṣa*) である瞋 (*dveṣa*) なども混在しているということである。すべての人間には瞋などの心のはたらきが必ずあって、それに防害されずに自然にはたらく慈悲が完全な本性となってしまうことはありえないと論敵は指摘するのである。たとえば、跳躍をどれ程練習した人でも何mどころか何百mも跳躍することはできないし、水はどんなに熱しても燃えることはない。同様に、慈悲も、ある程度は卓越することはあっても、完全な本性となってしまうことはない、つまり限度があると彼らは言うのである。この反論は、法の教示を *Veda* に求め、仏陀などの、法を知り教示する者の存在を否定したミーマーンサー学派に帰することができると思われる。その根拠は最後に提示したい。

2. さて、以上の反論に対してダルマキールティは次の様に答えている。

①もたらされた卓越性が〔その生起のために〕再度の意志的努力を必要としたり、②〔卓越性の〕所依 (āśraya) が存続しない場合には、卓越性が〔限りなく〕増大することはないだろう。しかし、本性とはその様なものではない。(PV. II. 120d-121)

たとえば、跳躍の場合、その卓越性は常に飛んでみなければわからず、その意味で再度の意志的努力に依存している。又、水を熱する場合、熱せられた水は蒸発してしまうので、高温度という卓越性の所依は存続しない。したがって、それらの場合には卓越性の増大に限度がある、とダルマキールティはこの偈で述べている。論敵のもちだしてきた跳躍と水の加熱という二つの例に対して、①再度の意志的努力に依存する、②所依が存続しないという二つの点を指摘して、仏陀の慈悲とのアナロジーを回避している。したがって、慈悲の修習の場合は、その二つがないので、限りなく慈悲は高められ、本性となりうるという結論が導きだされるのである。ダルマキールティの論証の要点は、ここにあるといえよう。

2.1. もう少し詳しく、この二点をめぐる議論を見てみよう。まず、慈悲はその生起にあたって再度の意志的努力を必要としないという点に関して、ダルマキールティは次のように指摘する。跳躍の場合、過去に卓越性をもたらした意志的努力は、現在、さらには将来の卓越性に対しては効力をもたない。(PV. II. 122a-c) したがって、再度の意志的努力、つまりジャンパーが再び飛んでみることがなければ、跳躍の卓越性はわからないのである。その様なものは本性とはいえない。本性とは、それ自体、自然にはたらいっているものであると彼は言う。それ故、慈悲が本性となるということは、再度の意志的努力に依存せず、慈悲が自然に心に起こることと理解される。

火などによって〔生じた〕木・水銀・金などの〔変化の〕ように、修習によって生じた慈悲は心に自然に起こる。(PV. II. 124)

たとえば、火によって木が少し焼かれる場合、火によってもたらされた、木が少し焦げるという変化は、木に本性として定まり、なくなることはない。焦げた木の状態は再度の意志的努力に依存することなく維持され、自然にその木に生じている。そして、さらに火に焼かれれば、その木は黒焦げになり、しまいには灰になってしまう。慈悲の場合も、全くこれと同様だと彼は言う。修習によって生じた慈悲は、心において自然にはたらき、もしさらなる修習があれば、さらに高まってゆくのである。

ここでは、再度の意志的努力に依存しないということが、自然に起こる (sva-sena pravṛtti, svarasavāhin) とパラフレーズされているが、これは仏教でいうとこ

ろの無巧用や自然任運、さらには法爾といった考えに通じるものである。カマラシーラが『修習次第』において、修習によって完成された大悲が svarasavāhin であると述べることも考慮すると、慈悲の理解において svarasavāhin は重要な概念であると言えよう。

2.2. 慈悲の所依は存続するという点についても、先の、火による木の変化の例があてはまる。火によって木が焼かれてゆく場合、変化の所依である木は存続している。所依である木が存在する限り、変化は起こりうるともいえる。では、慈悲の場合、その所依とは何なのか。それは心相続(cittasantāna)と考えられている。ダルマキールティは、有情の心を刹那刹那の心が等無間縁によって連らなつた心相続と理解している。それ故、修習によって慈悲は心相続において高められてゆくのである。

慈悲心などは、同類の先行する原因(bija)から増大するものである。したがって、修習がなされる時、どうして同じ状態のままであろうか。(PV. II. 126)

この様に考えると、慈悲をもった心から次の慈悲をもった心が生じ、それらが連らなつて心相続を形成していると理解できる。

しかし、跳躍の場合は、跳躍から跳躍がある、というわけではない。跳躍の原因は体力と努力に他ならない。そして、それらに能力の限界があるので、跳躍距離にも限度があるのである(PV. II. 127)。しかし、どうして、練習によって跳躍距離が伸びるのかという点、最初は身体の不全³⁾ゆえにすぐれた跳躍はないが、練習によって徐々にその不全が取除かれ、その人本来の能力があらわれるからである(PV. II. 128)とダルマキールティは続けている。

この所依としての心相続については、はたしてそれは永続するののかという問題が生じる。輪廻する限り心相続は存続するが、解脱して涅槃に入ってしまう場合は心相続は存続しないだろうという問題である。これは大乘仏教の無住処涅槃という考えによって解決される。ダルマキールティにおいても、仏は涅槃の境地を得ながら大悲によって輪廻の世界にとどまると理解されるので、全く問題はない。これは、Tattvasaṃgraha 及びその pañjikā (TS (P)) にも指摘されている⁴⁾。

又、このような、心相続を修習における永続的な所依とみなす見解は、たとえば、マッリシェーナの Syādvādamāñjarī やマーダヴァの Sarvadarśanasamgraha などにおけるように ātman の存在を主張する他学派に批判されるようになる⁵⁾。

以上のように、ダルマキールティは、慈悲の修習について、①再度の意志の努力に依存しないことと、②所依が存続することの二点から、跳躍などとはちがっ

て限りなく高められて本性となることを導きだしている。この様な彼の立場は、全面的に TS (P) に受け継がれることになる。TS (P) でもこの二点から、跳躍などの例が退けられ、慈悲などの修習による高まりが論証される⁶⁾。

3. さて、以上の見解を述べたのちに、ダルマキールティは述べる。

自己の原因から生じる慈悲は、自己の原因から生じる対治（つまり、瞋など）に妨げられない限り、心において絶対的本性となってゆく。(PV. II. 129)

ここでは、「瞋などに妨げられない限り」という条件が付せられている。しかし、心に瞋などが無いということがそもそもありうるのかという疑問が起こる。これについては、ダルマキールティは何も言及してはいないが、後に PV. II. 208 cd で述べられる自性清浄心という考えによって説明可能である。すなわち、心は本来清浄なもので、諸煩惱は外来のものであると理解され、道 (mārga) において心は煩惱のない本来の姿に向うとみなされるので、煩惱による妨げはないことになる⁷⁾。これも又、TS (P) に言及されている⁸⁾。

4. 以上がダルマキールティの慈悲の修習に対する見解であるが、まとめとして彼の結論を紹介しよう。

過去の長時にわたる修習は、慈悲・離欲・覚りなどといった後の心の徳性 (guṇa) が強められるための根本（原因）である。修習によって慈悲が本性となる。嫌悪・離欲・貧欲のように。(PV. II. 130-131ab)

繰り返し行うこと (abhyāsa) によって貧欲がその人の本性となることがあるように、修習によって慈悲も本性となってゆくというのである。

仏教において、智慧と慈悲は、車の両輪にたとえられるように重要な概念である。ダルマキールティにおいても変わりはない。智慧と慈悲をもった仏陀が四聖諦を説いたと考えられている⁹⁾。そして、その二つは、ともに心の徳性であり、長い間の修習によって限りなく高められたものに他ならない。この点を考えると、慈悲の修習の議論は、仏陀の智慧の問題、つまり Sarvajña の問題とパラレルなものと考えられる。デーヴェーンドラブッディは次の様な推論式を述べている。

心の徳性は絶え間ない修習がある時、人の完全な本性となる。

たとえば、ヴェーダに通じたバラモンのカーパーリカに対する嫌悪〔は彼が後にカーパーリカに改宗しても身についてしまっている〕ように。

大悲も心の徳性である。

〔ゆえに、大悲は絶え間ない修習がある時、人の完全な本性となる。〕

これは自性因 (svabhāvahetu) による推理である¹⁰⁾。

この推論式は、後代、ラトナキールティ等に述べられる Sarvajña の推論式を想起させる¹¹⁾。又、後の TS (P) やジャйна教論書などにおいて、このような「修習による限りない卓越」という問題は、Sarvajña の議論の中で検討されるようになる。

5. 最後に PV. II. 120a-d の pūrvapakṣa について検討したい。ダルマキールティに以上の如く批判される、「跳躍などのように、慈悲などの修習による高まりにも限度があろう」という主張は、TS (P) やラトナキールティの Sarvajñasiddhi, さらには諸々のジャйна教論書に紹介されている¹²⁾。そして、それはミーマーンサー学派に帰せられている。それらの論書には次のような偈が引用される。

空中を10ハスタ跳躍することはできるが、いくら練習しても1ヨージャナ跳躍することはできない¹³⁾。

これはすでに、K. B. Pathak や E. Frauwallner によって、一連の Sarvajña の批判の偈とともに、クマーリラの Brhātṭikā のものであることが報告されている¹⁴⁾。彼らは言及しないが、PV. II における以上の議論もこの Brhātṭikā の偈と何らかの関係があると思われる。すでに述べたように、この偈に対する TS (P) の批判は全面的に PV. II の方法を受け継いでいる。さらに、注釈者であるシャーキャマティは PV. II の議論を注釈する際に pūrvapakṣa としてクマーリラの名をもってこの偈を引用している¹⁵⁾。これらの点を考慮すると、ダルマキールティの議論は、Brhātṭikā の当該の偈と密接な関係をもっていると言えよう。

1) 以下 kārīkā 番号は PV (ed. by Miyasaka) に基づく。

2) cf. Bhāvanākrama I. 500, 7-11.

3) Monorathanandin によれば、身体の不全 (dehavaiguṇya) とは śleṣman 等によって作られた重さ (śleṣmādikṛtagaurava) のことである。cf. PVV (Shastri's ed.) 49, 11.

4) cf. PV. II. 197cd-199ab, TS (P) 3432.

5) cf. Syādvādamāñjarī (Dhruva's ed.) 124, 13-20. Sarvadarśanasamgraha (Abhyankar's ed.) 248, 3-5.

6) cf. TS (P) 3420-3460.

7) cf. PV. I. 221 (=PV. II. 210cd-211ab).

8) cf. TS (P) 3433-3434.

9) cf. PV. II. 282cd.

10) PV-Pañjikā (Derge ed.) 51b5-6. 喩例の解釈にあたっては東京大学原実教授に御教示いただいた。なお、PVSVT. 400, 9-11 を参照されたい。

11) cf. Sarvajñasiddhi (Thakur's ed.) 1, 17-21. Tarkabhāṣā (Iyengar's ed.) 61, 4-8.

12) 注(14)の二論文を参照されたい。

13) TS では 3167.

14) K. B. Pathak, Kumārila's Verses Attacking the Jain and Buddhist Notions of an Omniscient Being, ABORI 12-2, 1931. E. Frauwallner, Kumārila's Brhātṭikā, WZK- SO 6, 1962.

15) PV-Ṭikā (Derge ed.) 116a5-6.

(広島大学大学院)